

研究

横川先生と佐伯 (三)

「郷土の研究」に学ぶもの

会員 山本 保

(承前)

前回は、郷土の山村のくらしについて触れましたが、今回は、漁村のくらしについて紹介いたします。

只、漁村のくらし (横川末吉著「郷土の研究」より)

段々畑のことについて述べた所を、もう一度思い出してください。

家を建てる土地さえ、十分に得られない狭い海岸の低地、まるで、山の村のように斜面にそって上る坂道など、低地の少ないのは、山の村よりも海岸部はもっとひどいようです。

石を敷きつめた坂道は曲りくねり、家の向きもまちまちです。正しい方向に向くよりも、余地をどんなに敷地に利用するかが、根本的な問題でしょうが、庭もほとんどありませんし、道路と庭の区別もはっきりしません。漁村の道を通って部落に入ると、左にいていの人、道のばっさりしないのにまごつきます。

やごと、立ちこんだ家の間を出ると、また、ばっさりした道のあるのに驚かされます。廢物の舟板をしまいに利用している家並の狭い道路

を、左きさんの人が元気に往来しています。

井戸の少ないのも一つの特徵でしょう。左にいて、十戸内外に一個の割合で、所によっては、坂の上の家まで、水さかつき上げます。大島(注・鶴見所)の椎木山はそれです。ふるも少ないです。大島は、海岸集落の模範的なものですが、井戸端という地名があります。そのふるに、毎晩六十人ぐらいも入りに来ます。家庭ごとじこめられた人々には、かえって、にぎやかな共同生活の楽しみかもしれませんが、やはり不便であり、不衛生であるかもしれませぬ。

水の少ないことも、今一つの大きな苦しみです。雨が少なくなると、左にいての井戸は水がかれます。夜中の三時から四時から、順番で水をくおこともあるようですが、女の人には忙しい家事のうえに、更に何という重圧でしょう。こんな不便の原因は、山を段々畑にするために、木を切つて、すつかり裸にしたせいでもあります。

第一、たきぎがないのです。大島の人々は、麦わらをたくことしありますが、これは、舟底の殺虫にたいせつですし、保戸島の人々は、流水を海岸で捨ています。しかし、とてもそんなことで足らないでしょうから、舟で、近所の村に買いに行きます。

井戸水のかれやすいのも、森林の無いためと思われ、詳しく話しましたので略しましょう。

そんな苦しい不便な海岸の村が、どうして、あんなにたくさん人口を持つているのでしょうか。山村と比べて、あまりにも不思議ではありませんか。

江戸時代の中ごろ、いもを作り始めたのが、人口増加の原因の一つだと考えられますが、もつと外にはな

いでしようか。考えてください。

海の富を求め、海上の生活は、陸上のように土地そのものを利用するのではありません。つまり、陸地はもともと単なる生活の基地でしかありません。海は、利用すべき無限の海洋を控えています。この海は世の中が聞けるとともに、幾分づつ魚が減つたようです。

しかし、昔は、今よりもっと利用しやすかつたと思われまふ。もつとも、個人のカラではどうにもなりません。共同の組織を持つてば、とれまふ。肥料にするほど、魚はたくさんとれたのです。それで、人口の増大を希望したと考えてよいと思ひます。

魚のとれぬ年のために、山を段々畑に開き、できれば、たくさんの方が、魚がいつ湧かよせてもよいように期待してはいたのではないのでしょうか。

山の人は、個人生活をもとにして、食べる人のふえのを恐れたのに対し、海の人は共同作業をもとにして、生産のあがるのを歓迎したと考へられます。そして、この考へは、今でも考へられる二つの人口政策の原理ではないでしょうか。

沿岸漁業がしだいに近海漁業に移つたのは、たぶん明治時代から後のことでしょう。設備のよい船が機械力を使って、活動を始めました。船の行動半径は、とても大きくなりました。

したがって、漁村にも中心になる所が形成されたと思ひます。漁業方法も改良され、漁場そのものにも大きな変化が生じました。結局、多くの漁村は、漁業の第一線から敗退したと考へられます。そして、代後・荒網代（以上佐伯市松浦・大島（以上観音町）間越・宮の浦（以上米津村）尾浦・蒲江（以上蒲江町）がようやく残り、更に、最後まで、どこかががんばることでしょう。

もつとも、元気のよい海岸の人々は、ただ、座して敗退するのを待つほど無気力ではありませんでした。明治以後の日本の発展に親じて、土木請負として日本各地はもとより、遠く大陸にまでも一時は発展しました。この時、それまでの網を中心とした団結の組織が、そのまま、土木事業の発展を助けたと思ひます。山の生活と海の生活との似た所、違ふ所きもう一度ゆつくり考へましよう。

(注)

段々畑は海岸地方に段々畑が多い。この畑で昔、夏にはおわを、冬には麦を作つていましが、江戸時代の中頃から、夏にはいもを作るようになった。明治以後、有明・松浦・浅海井・浪太などの地方は、みかん栽培に切り替へました。現在みかんの生産過剰で、みかん農家はその対策に頭を悩ましています。

いもは、別称、からいも、とういも、りゆうぎゆういも、かんしよともいいます。江戸中期の儒者、蘭学者、青木昆陽（近江の人）は甘藷を取寄せ「蕃薯考」を著して、種薯と共に配付しました。没後（明和六年）甘藷先生とあがめられました。さつまいもが、江戸時代の食糧危機を救いました。

しとみ、昔の建物で、日光をよけ風雨を防ぐために格子（こし）の裏に板を張つた戸。今の戸に当たります。

沿岸漁業はわが国は、沿岸漁業のモデル水域に瀬戸内海をえらんで、昭和三十八年春、瀬戸内海栽培漁業センターを創設しました。上浦事業場（上浦所）はその一つです。

近海漁業「近海で行なう漁業。沿岸漁業と沖合漁業を合んでいます。沖合漁業は沿岸漁業より一歩進歩したものです。」

遠洋漁業「遠洋漁船で、漁具、漁艇を積み、魚の貯蔵、加工の設備をほどこして、遠洋を航行して行なう漁業です。」

旧藩時代、「佐伯の殿様、浦でもつ。」といわれています。

佐伯地方の海岸は、典型的なりアス式で、東北最勝海浦藩産大浜(上崗町)より、西南名護産津浦耕海(蒲江町)に至るまでの海岸線が長さ八十余里、漁業の盛んなところでした。

網漁業がその王座を締め、地曳、船曳など小引網とよばれる定網が隆盛をきわめていました。小曳網は、主として鰯ととり、その漁獲高は佐伯藩の賦政を豊かにしていました。

その漁業も、明治、大正、昭和の時代には、どんなに変化したのでしようか。

昭和二十四年頃、横川先生は「漁業方法の改良や、漁場の変化等により多くの漁村は、漁業の第一線から敷退したとしか考えられません。しかし、最後まで、どこかががんばることでしょう。」と述べています。現在では、どんな状態でしょうか。

観見町

豊後水道は、美しいリアス式海岸美を見せる鶴見半島は、いま大きく変るうとしています。

かつて、陸の孤島と呼ばれ、半島の突端まで、点々と存在する村落へは、尾根づたいの極端にせまい、険しい

山道を歩くか、海上を小舟で渡るかしかありませんでした。

学校へ通ったり、病人を運んだり、生活必需品を買ったりする苦勞なども、しだいに皆捨てたなりつつあります。

それは半島のはずれ、握寄めざして、県道を整備がくんぐん進んでいるからです。

中越までバスが通うようになりました。島江まで完全に舗装され、そして猿戸まで車で往來できるようになりました。

海に落ちこむ海岸線とけずりとイながら、さらに道は開かれています。

町の主な産業は漁業で、長途に恵まれています。

耕地が目とんどのないため、漁業に頼り、大島の一本釣り、松浦地区のきんちめく網などに期待がかけられています。

漁獲高は、アジ、イワシ、ブリなどで、県下のトップクラスにあります。最近では、交通機関の発達で、遠くは東京方面まで出荷されています。

町では、産業振興で住民所得の向上をめざして、豊後水道を包括した一大漁業基地の造成や、豊富な海岸線と生かし、さざえ、うば、おあびなどの養殖場をつくる計画を押し進めています。

米水津村

村の西にそびえる元越山(ユルハシ)は、明治の文豪国木田独歩がこよなく愛したことで有名です。

佐伯史談会員も、登山を試みていますが、その眺望は絶佳といわれています。

村の産業は、農業と漁業が中心になっています。

農業経営の総面積のうち、約九〇%はみかん園で、高品質のみかんが生産されていますが、若い人の村外への流出が多く、その後継者づくりが悩まされています。栽培面積は少ないため、収穫に頼る人も多く、約九五%が兼業農家です。

漁業は、天然の良好、米水津鴻をもち、宮野浦のきん着網を中心に、船びき網、さし網、底びき網、一本釣りなどによって、イワシ、アジ、サバ、シラヌイなど、年間五、〇〇トの水揚げがあります。

しかし、最近の沿岸漁業は、乱獲がたまって不振の傾向にあります。

村では、漁業の近代化を目指し、資源の確保を図るため、魚礁の設置などに積極的に取り組んでいます。ブリ、ハマチ、アジの養殖や、唐干、イリコなどの水産加工も盛んです。なかでも唐干づくりの冬の季節には、村の婦人の大半が総出で仕事に精を出しています。

上浦町

暖嵐の流は、茂海井駅近くにあり、浪の高さは十五メートルで、その両岸は石壁が屏立していて壮観です。

豊後二見ヶ浦も、やはり、駅近くの海上にあって、伊勢(三重県)の二見ヶ浦に匹敵するほどの景観です。

瀬谷岬に突出した瀬谷公園は、春日桜の名所、夏は海水浴場として有名です。

県道大浜―浅海井線の改修工事が、急ピツチで進められています。

道路の幅は七メートルになり、高波を受けるところは路面を高くし、海側に高さ一五メートルの波返しを設けています。

舗装も半分ほど完成して、見遠えるような道路に改修されつつあります。

町の産業は農業と漁業です。

みかん栽培は、昭和四十年頃から急速に伸び、いまでは、町の耕地面積の三分の二以上を占めています。急傾斜のみかん園の中腹を継続する基幹農道と、これを結ぶ支線農道など、道づくりがなされています。

漁業は、海の町にふさわしく、瀬谷内海栽培漁業センターと、県水産試験場の二つの試験研究機関が、津井に設置されて、大分県の栽培漁業の中心地となっています。漁業センターでは、カサゴ、アワビ、メバルなどの養殖が行なわれています。県下で水揚げされるクルマエビの大半は、この漁業センターで飼育され、各地に放流されています。

また、県水産試験場では、「音楽をきかせて魚を飼育する研究」などの、ユニークな各種の実験が続けられています。

町でも、この漁業から育てる漁業への転換をめぐり、エビやアワビなどの高級魚貝類の養殖事業を推進しています。

蒲江町

日豊海岸国定公園の指定さうけた現在、県道延岡―佐伯線(延岡―蒲江)畑野浦峠―水立―蛇崎―佐伯大橋―幹線道路―佐伯駅の重要さが浮かびあがってきました。

県南への交通の難所といわれる畑野浦峠は、長さ九百三十四メートルの新しいトンネルの掘り進められ、本年中には完成する予定です。

更に、この県道は、国道に昇格することになりました。国の予算で、道路が大々的に整備されれば、海岸部の開発は、一段と促進されることでしょう。

町の産業は、水産業を主とする半農半漁です。天然の

良港を持つているため、昔から、漁業基地として有名です。

しかし、最近の沿岸漁業は、乱獲がたつて不振の傾向にあります。

このため、町では毎年、魚礁や築磯を設置するなど、漁場の改善や造成を進め、魚族の繁殖をはかっています。昭和二十六年導入された真珠養殖は、一時漁業生産額の中で大きな比重を占めていましたが、昭和四十一年頃から不況を続け、最近、やや回復のきざしを示しています。

ハマキやノリの養殖も盛んで、屋形島の北側海岸一帯は、大規模な養殖漁場建設のための調査が続けられています。

波当津海岸、元猿海岸や、豊富なサンゴ礁、熱帯魚などのいる蒲江の海中公園は、観光開発適地として観光客を浴びつつあります。(この項終り)

解説

絵はがきに見る(その三)

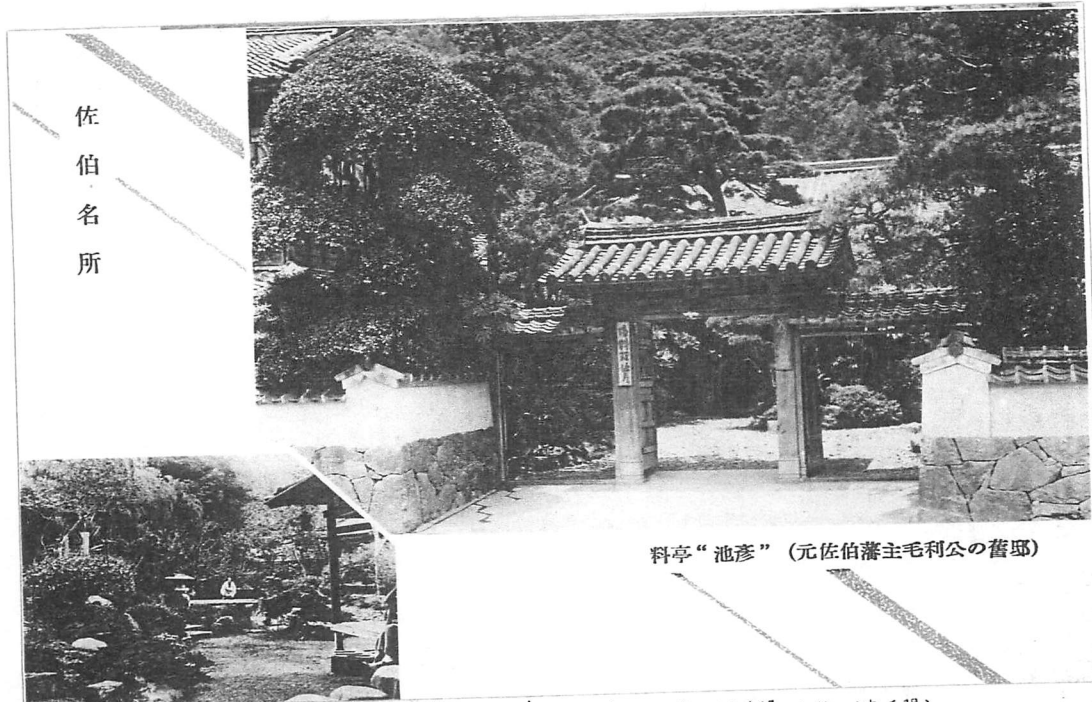
取壊される、三府御門。の姿(下の写真)

昨年の夏であったか、西谷の武家長屋門が、市民に惜しまれながら、とうとう取壊された。暮には、もう藪のふくらみかけた西田邸の白木蓮が咲き消えた。そして並ぶの家屋が次々に壊され、近く料亭池彦の塀と正門が、市民の眼から消え去ろうとしている。よいことであらうか。

いづれも大寺前から西谷に通ずる、道路幅の狭小になったのである。佐伯の人たちは、こうして歴史地を文化財や美しい自然を失っている。惜しい。

明治四年、佐伯藩屋敷町を見ると、三府御門と書かれてあり、門内は勘定所や奉行所や代官所など、佐伯藩の司政庁があった。明治年間、以藩主毛利家が私邸としてこの門内に住んでおられた。いささか形は古がたておろうが、この門は同じとこみであった。

近くとり壊されて道路になる。こうして佐伯の歴史は書替えられる。



佐伯名所

料亭“池彦”(元佐伯藩主毛利公の舊邸)

取壊される佐伯藩三府御門(後毛利家私邸正門、今洲崎池彦正門)